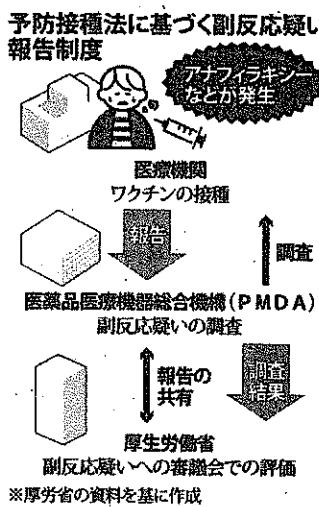


重 複 反 應 角 析 難 題

疑い17例 厚労部会7例認定

厚生労働省は12日、新型コロナウイルスのワクチン接種後、急性で重いアレルギー反応であるアナフィラキシーの疑い例として医療機関から報告があった17例を詳しく調べたところ、国際的な基準でアナフィラキシーと判断されたのは7例だったと明らかにした。ワクチンの安否性について評価する専門部会は、「現時点では女性に重大な懸念はない」と結論づけた上で、「今後も症例を集めて一層の解析する必要がある」と指摘した。



外國と頻度比較 困難

鹿児省の専門部会は、「クチ」の接種と副反応との関係を検証するのが目的だ。この日は重い副反応の一例であり、アナフィラキシーの発生頻度が議論の焦点となつた。

や英國に比べると外に向ふに見える」と懸念を示していた。
アナフィラキシーの報告頻度を諸外国と單純に比較するには難しい。症例の定義が各国で異なる可能性があり、また、統計的評価のための基準が必ずしも統一されていない。

の場合は幅広く情報を集めて評価対象としていたため、精査した結果、該当しないとされるケースもある。国内報告3例のうち、17日までに報告された17例を専門家が評価したところ

接種部位に疼痛が出た人が92%と多かった。疼痛は接種翌日に起きたことが多い、接種3日後に多くが回復したといふ。

先行接種は9月17日から
国立病院機構など全国39都

し、データを登録した。
約2万人の性別は男性34%、女性66%。年齢は20代34%、30代24%、40代25%、50代21%、60代以上9%など。職種は医師17%だった。職種は医師17%など。既往歴は47%など。

めの薬を服用していた。他には、倦怠感が23%、頭痛が21%、接種部位の赤みが14%だった。接種後30分以内に、立ちくらみや動悸などが88人に起きたが、アナフィラキシーはなかった。

い。接種後2日間は痛いものだと覺悟して接種を受けでもらう方がいい。一方、接種後の発熱は想定より低かった。データを精算していきたい」と話した。

外国と頻度比較困難

厚労省の専門部会は、ワチンの接種と副反応との関係を検証するのが目的で、この日本は割合が低い反応疑い（ワクチンの発生）
調査
（PMDA）
調査結果
での評価

米英法オランダ・ノルウェー（）

厚生労働省の専門部会は、ワチンの接種と副反応との関係を検証するのが目的で、この日本は割合が低い反応疑い（ワクチンの発生）
調査
（PMDA）
調査結果
での評価

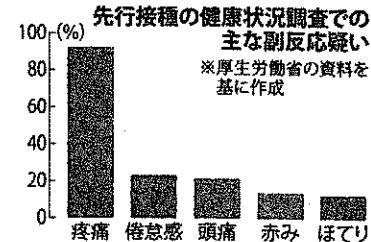
情報収集し評価できるのが利点で、厚労省は從来この分類でアナフィラキシーを評価してきた。

（レベル1～5）」が使われる。世界的に同じ基準で

判斷されたのは7例だつた。

9割に

集
点



た。
アナフィラキシーは発症直後の対応が重要な点だ。これまで医療機関が適切に対応し、全症例が回復した。一方、高齢者の優先接種では、自覚症状の訴えに応じた対応ができるかが鍵になる。専門部会では「高齢者は、接種場所や環境も異なる。接種する医療側へ情報と提供し、対応できる体制を備えておくことが大切だ」との声が上がった。
千葉大病院の猪狩英俊・感染制御部長は、「日本での報告を見る限り、海外よりもアナフィラキシーの頻度が高く見えるが、これを理

悪性腫瘍などで、88%がいすれでもなかった。今月10日に回収した約1万7000人分について分析すると、際だって多かつた疼痛の症状が出た人のうち、1000人超が痛み止めの薬を服用していた。他には、倦怠感が23%、頭痛が21%、接種部位の赤みが14%だった。接種後30分以内に、立ちくらみや動悸などが88人に起きたが、アナフィラキシーはなかった。

中間報告をまとめた伊藤澄信・国立病院機構本部総合研究センター長は部会で「新型インフルより疼痛が発生する割合は明らかに高い。接種後2日間は痛いものだと覚悟して接種を受けでもらう方がいい。一方、接種後の発熱は想定より低かった。データを精査していきたい」と話した。

【石田奈津子、矢澤禪範】